

旅する工具屋



第五話：世界最速のコースターと七つ星ホテル

2014年春、私は重たい病に苛まれていました。ドイツに住み、仕事でも個人でもヨーロッパを飛び回る生活をするうちに「飽き」を感じ始めたのです。どの国に行っても、だいたい旧市街があり、大聖堂(的なもの)があり、名物ご飯があります。そこには確かに違いがあり、最初は全てが新鮮で全てがスペシャルなものに見えます。しかし次第に…自発的かつ意欲的な努力無しにヨーロッパから刺激を感じなくなっている事に気付きました。この重度の「贅沢病」を治すべく、私はバックパックに荷物を詰め、ペルシャ湾へショック療法を受けに行きました。

フランクフルトから6時間弱のフライト後、これまでで一番長い入国審査を経て私はアラブ首長国連邦の首都アブダビに降り立ちました。外は夜中にも関わらず蒸し器の中にいるような暑さで、人も多く風も通らないタクシー乗り場はビギナーの私には厳しい環境でした。

汗だくで待つこと数分、配車係は全然私に車を寄越してくれません。しかしふと脇を見ると、リッチな(感じの)人がどんどん乗車しています。自分の格好を見ると、ハーフパンツにTシャツ、サンダル、そしてバックパック…。自分が置かれた状況を把握した私はリッチ層からタクシーを勝ち取るべく、予約していた高級ホテルの予約証を見せ、「早くチェックインしないと」と強気な口調で伝えました。ホテル名を見た配車係の態度は一変し、すぐに大きな声で命令しました。「こちらのミスターをヴァイスロイに！」

F1コースを跨ぐホテルで熟睡した翌朝、シャトルバスは10分ほどでフェラーリ・ワールドに到着。ここに来た目的はただ一つ、世界最速のローラーコースター、フォーミュラ・ロシアに乗るためです。身に付けている全ての物を預け、ゴーグルを着けた後シンプルなT字形のバーとベルトで身体を固定すると早速発進です。

普通のコースターと違い、重力による落下ではなく油圧ウィンチにより「発射」されるこのローラーコースターは2.0秒で100 km/h、5秒後には240 km/hに到達します。終わりなき加速に自身の最期を感じた私は絶叫マシンで生まれて初めて絶叫しました。



自分の「生命」に素手で触れるような1周の後、加速中の記念写真(自動的に撮られます)を見て驚きました。そこには満面の笑みを浮かべた私がいたのです。記憶の中では悲慘な表情で絶叫していたはずが…極限状態に追い込まれた時、人は意外と自分の知らない自分になっているのかもしれない。

フェラーリ・ワールドとマリーナサーキットを中心にヤス島を満喫した後、私はアブダビ本土へ移動しました。建設費 550 億円、世界最大のペルシャ絨毯を敷いた、シェイク・ザイドモスクに寄り、その圧倒的な景色と電子レンジの中にある様な暑さを存分に楽しみました。



予約していた別のホテルに向かうために乗ったタクシーのドライバーは英語が達人な人でした。彼はまた話好きでもあり、現地の人々の本当の暮らしや、ドライバーの生活レベル、アラブの様々な事を話してくれました。信号で止まった時、エアコンの効いた車内から我々が外を見ると 40℃を越す陽射しの下で草むしりをする黒いアバヤ(目元以外の全身を包む民族衣装)を纏った女性がいました。「俺らは良い方だよな、男に生まれたんだから」彼の言葉に私は深く考えさせられました。

走る事しばらく、遠くには宮殿とも神殿とも似付かない不思議な建物が見えてきました。ドライバーに聞くと”世界で唯一の七つ星ホテル”とのこと。時間に余裕があった私は中を見てみたくなりましたが、VIP 客のプライベート保護のため観光客はゲートで拒否される事が増えてきているそうです。聞くほどに興味をそそられる七つ星ホテル、すっかり仲良くなった我々は力を合せて入場を試みることにしました。

バックパックを足元に押し込んで隠し、いよいよエミレーツ・パレスへ。凱旋門の様なゲートではやはりチェックが入ります。ドライバーが現地語でしばらく話すと、門番は私に顔を向けて「Sir, どちらへ?」と話しかけてきました。ドライバーから事前に、なるべく横柄な態度で臨んだ方がいいとアドバイスを受けていたので「ティールームの約束に遅れそうなんだ」と、半ば止められて苛立ったような口調で言うところ「失礼致しました, Sir」と通してくれました。



煌くエントランスを通り、博物館の様なロビーを抜けると、金を買える自販機(Gold To Go)、ハープの生演奏など強烈な非日常感に包まれます。記念に金箔カプチーノを飲み散策したあと自分のホテルに向かおうとゲートへ向かうと、さっきの門番が「クチんところ、金箔ついてるぜ」と笑いながら教えてくれました。口調から、私は最早ゲストではなく去りゆく冷やかしの一人と認められたんだと感じ、何故か少し緊張が解けた事をよく覚えています。

数日後、ドイツに戻った私は自分がいかに平穩で平等な世界に居るのかを痛感し、ぼんやりしていた日々が鮮やかさを取り戻している事に気付きました。皆様も是非アラブに...とは言いませんが、自発的でもショック療法は効く、という事だけお耳に留めて頂ければ幸いです。

文：ペンネーム 17chandler